

本の伝搬力と魅力と今後

aquilex

文学とはなんぞや。世がみとめる文学とはどのようなものなのか。これまでにその権威に認められた地位を得た作品には何がかけられているのか。これにひとつ重要な項目が陰に潜んでいる。その作品が認められた「時代」である。ひとそれぞれが、それぞれの環境でそれこそ、それぞれの体験・経験を経て、様々な明日にむかっている。これは、海亀の子供たちが大海原にむけて這いずり、一生を費やしても巡ることのできない大海へ冒険するようでもある。アフリカに残された大自然界における動物、植物、昆虫などの連鎖であるとか、棲み分けといったことを考えてしまうと、いまある人間社会の状況を含め、いたって自然であるからして放置しておくことが理想のようでもある。しかし、進化の過程で護身のために変態機能を備えていたり、特殊環境順応するように変体している様子などをみると、生命体そのものにも延命とか種族保存といったような能力が備わっているようでもある（生命体について追求をはじめてしまうとエンドレスにサイエンスティックな世界へ突入せねばなるまい）。そういったなかで、世に認められた文学とは何であるのかと問うと、少しばかり何かが違うようにみえる。横道にそれるが、英語であっても、「わかった」を「I SEE」という。言語が違うのに表現方法が似ているとなにかしらの親近感が湧く、というように、筆者・読者間になにかしらの共通項は必要なのはいうまでもない。検閲などという制度があったり世界の情報を遮断するような社会から離脱することができ大衆は自由を謳歌し満喫してきた。労働者保護が法律化したものの、完全に実行できる組織といえば公のものくらいなものではなかろうか。それでも、その以前に比較すればかなり救われた状況ではあるのではある。選挙権にしても随分と不必要な権利を広く開放したといえる。どれだけ選挙に対する知識のある権者が存在し、どれだけ公平な審査視をもって選挙にのぞんでるのか、議員の目的、政党の動向や思惑、政府機関の人事。政府に勤務でもしていなければわかりもしないことを、どうして無知な一般市民が、選挙の折にのみ声をからしているだけのよう（そのようにしかみえない）立候補者をたてねばならないのか。投票率が低いのはその疲労した制度を継続している嫌悪感の現れでもあるといえる。無関心な市民の態度にも問題はあつた。行き過ぎた権利の主張や、公的な規則の遵守放棄など、社会生活からの逸脱化が蔓延し常習化が目立つ。これには高度化社会の起因によつてあるといえる。P・Fドラッカー「ネクスト ソサエティ」2002年やジョン・ケネス・ガルブレイズ「日本経済へ最後の警告」2002年はまるで予言者のように暗示している。さらに恐ろしいのはF・A・ハイエク「隷属への道」1992年である。私の場合恐怖で手が震えるのを憶えた。まあ、無理矢理冷静に考察してみても確かに平和であるために一つになるための手段としてまとまることは必然的であり頂点を除いてすべて隷属であるのだという屈辱にも似た結論なのだ。十分に吟味したわけではないので他言はできない。これは雑誌「致知」のなかで渡部昇一が推薦していた書物である。その反面、というか内面事情とでもいうか青木直人「中国ODA 6兆円の闇」であるとか、田原総一郎、高橋洋一、室伏哲朗、新藤宗之各氏の著作にも興味深いものがある。それでもまだ当国内に限られた狭いところでのひそひそ話に過ぎない。吉田茂の著作にあつた「世界と日本」という崇高な目標はあれは文学としてなら最高に鮮やかな出来映えではなかつたかとおもうのである。しかしながら、国民を教唆してこの崇高なる目標に立ち向かうことは困難であり危険である。GHQに拘束されるかもしれません。社会党成立の陰にでさえ危険な香りがいっぱいなのである。けれども、大衆文化に目をもどしてみると最近では、地上

デジタル放送も定着化し、携帯電話からスマートフォンと使用形態範囲のひろいモバイルが急速にひろまりつつある。ソフトのほうも、ゲームが主流で先行きが危ぶまれたが、そういう時代でもなくなってきたようでもある。さて、さらには本離れといわれる昨今であるが、電子ブックのハードが再登場して消費者のニーズはいかほどなものであろうか。自然普及など見込めそうにないので仕掛け人による操作は不可欠であろう。たとえばこんなところ。今あなたがいるところ。そう、ここ。そして単に非日常の現実というところから離脱していかねばならないとおもうのである。非現実のリアル描写による村上春樹の「TVピープル」が文学かどうかはさしおいてピカソ級だといえる。いろいろ試してみたい希望やアイデアがうっすらと浮かんではいるのだが、それにはまずそこに到達できる自分へと磨きをかけねば、おいそれと見つけ出してもらえないということなのだ。そういうことである。